

## コンサートホール以外での音楽会

欧州では、教会で著名なアーティストが演奏する機会も多くあるが、欧州で一番古い時計塔のある聖ペーター教会で、ミッシェル・マイスキのチェロを間近に聴けた(2月27日)。チャーツ・チェンバー・アーティストへの客演コンサートだったが、ポツケリーニ「チェロ協奏曲第2番」をおとなしい音で始め、美しくも素朴な音が教会内を満たした後、華麗な音楽が全開した。続くシューベルト《アルペジオ・ソナタ》(チェロと弦楽オーケストラ版は、常にテンションを保つてたゆたう、フレージングが美しいオーケストラに支えられ、ロシアの匂いの濃いシューベルトではあったが、切なさと希望にあふれた明るさを対比させた。休憩中、教会の奥から派手なプリントのダウンコートを着たマイスキが、チェロのハードケースを背負って、普通に教会を一人で出ていくのに会えたのは、教会コンサートの醍醐味だ。後半は、バルトークが第二次世界大戦の開戦2週間前に、ベルンの山間で作曲したという「デイヴェルテイメント」で、現代の不穏な空気にマッチしており、作曲家と同郷のガボール・タカーチ・ナギの指揮は素晴らしいインスピレーションにあふれていた。

その他、2度来目しているドイツのピアニスト、アレクサンダー・クリツヒエルが、3月19日、日本のミュージシャン、布袋寅泰も出演したライヴハウス、カウフロイテンで行われた「クラシックの夕べ」と題されたトーク付きの演奏会に出演した。2月1日に発売された新譜から、タイトル曲のベートーヴェン(リスト編)《遙かなる

恋人に》と、シューマン《交響的練習曲》を弾き、最後には自作の「子守唄」を披露した。敬愛していた師ウラディーミル・クラインフが他界し、ピアノをやめようとして思いつめていた時に、師を想って弾いた演奏がきっかけでソニー・クラシカルと契約、2013年にエコー・クラシカル賞の「後継者アーティスト賞」を受賞した。彼のピアノは、歌うように優しいメロディ・ラインが格別だが、ピアノを弾く時、何かのイメージを表現するのではなく、霊媒のように自分を通して音楽に語らせるのだという。今回の新譜は、本番前には必ず電話していた祖母が、遙かな「あの世」に行ってしまった気持ちを謳ったといい、すでにヒット・チャートの第5位にのぼりつめていく。このクラシカルな夕べでも「前例がないほどの拍手だ」と、司会者が驚いていた。

## アルゲリッチとババヤン

チューリヒ・トーンハレ改装中の仮住まいマークで、3月2日、マルタ・アルゲリッチとセルゲイ・ババヤンを聴いた。

開演時間を20分過ぎたところ、二人は手を繋いでリラクセスした様子で登場したが、演奏が始まると、研ぎすまされた集中力で支配された。プロコフィエフ作曲の「バレエ組曲(ロメオとジュリエット)」「(ババヤン編曲)は、叩くようにアクセントを強調するババヤンと、歌うような落ち着きを聴かせるアルゲリッチとが、ロメオとジュリエットの対話のように聴こえた。ババヤンの描く激しい悲劇に疲れた耳に、続くモーツァルト「2台のピアノのためのソナタ」二長調は美しく、心に沁みわたった。輝かしい音色を聴かせたババヤンに対し、アルゲリッチはまた落ち着いた役割を担い、ウ

オルファンクとナンネルのモーツァルト姉弟のようだ。第2楽章は音が立たず、パワードウンしたようだったが、第3楽章では前のめりに攻めながらも、柔らかに抜く音など格別だった。そして第1ピアノと第2ピアノを交代して、またプロコフィエフに戻り、《ハムレット》、《エフゲニー・オネーギン》、《スベードの女王》と展開して、《プーシキン・ワルツ》、《戦争と平和》と続く各曲はアルゲリッチにピッタリだった。途中で携帯電話の着信音が流れたが、彼女はパッと顔を上げて反応しただけで、演奏に集中し続けていた。

## チューリヒ歌劇場の

## 《ヘンゼルとグレーテル》

昨年11月18日の初日からチューリヒの子供たちを楽しませているファンパティンク《ヘンゼルとグレーテル》を、3月24日の日曜日の午後、子供たちに囲まれて観劇した。ロバート・カーセンの演出は、「おとぎ話のオペラ版」ではなく、現代の子供たちが共感できるステージになっていた。落書きだらけの壁の前に停めたキャンピングカーで暮らしているヘンゼルとグレーテルは、踊るシーンもヒップホップ調。ブレイクダンス等を踊るダンサーも登場したり、クリスマスツリーが林立する森では、お菓子の家ではなく、自転車やテレビ、おもちゃの箱などが並ぶショー・ウインドウが子供たちを誘う。キャストは歌も演技も自然

で、単純に楽しめた。グレーテル役のオルガ・クルチンスカは、初役とは思えないし、ヘンゼル役のデニス・ウズンも本物の男の子のような好演だった。母親兼魔女のイレエネ・フリードリは、硬い声や難のある高音もすべて味方につけ、適役だった。父親役は急な代役をマティアス・ハウスマンが引き受けた。マルクス・ボシュナーが率いるフィルハーモニア・チューリッヒは、ざわつきがおさまらない子供だらけの客席に、深い響きの音色を聴かせた。最後は児童合唱団が手を振るなど、子供たちを惹き付ける演出も忘れない。このような質の高い企画が、次世代観客を育てる最善策であろう。



チューリヒ歌劇場《ヘンゼルとグレーテル》から ©T+T/Tanja Doredorf